

ボールドウィン保守主義の政治思想的側面と貢献

——ニュー・コンサーヴァティズムを手がかりに——

渡 邊 容 一 郎

一．序 説

二．ジョン・ラムスデン「ボールドウィン保守主義」論再考

三．スタンリー・ボールドウィンのニュー・コンサーヴァティズム

四．結 語

一．序 説

現在（二〇二〇年代）ならびに戦間期（一九二〇年代）には三つの共通点が見出せる。一つ目は、覇権国（hegemon）の相対的衰退に伴う転換期ないし過渡期にあること。二つ目は、イデオロギーの左右を問わず様々な極端主義・権威主義が抬頭してきた点である。それゆえ、戦間期の政治史を考察することは、今日の政治課題解決の糸口になると言

えよう。

そこで本稿は、戦間期イギリスを代表する保守党政治家スタンリー・ボールドウィン（Stanley Baldwin）の保守主義^①に注目し、とりわけ野党党首時代（一九二四年）の知られざる政治思想的側面を考察の対象とする。そうすることによって、三つ目の共通点・「社会の分断化」を克服する手がかりも得られると思うからである。

しかしながら、イギリス保守党史・保守主義史研究において、ボールドウィンの保守主義が関心の的となることはほとんどなかったと言つてよい。その理由として、サッチャー（Margaret Thatcher）以外の歴代党首同様、ボールドウィンその人にイデオロギー的要素を——表面上は——見出すのが難しかった点を指摘することができよう。これについて、戦間期イギリス保守党史研究の泰斗ラムスデン（John Ramsden）も次のように主張している。「保守主義思想（Conservative thought）に対するボールドウィンの貢献は、政策でも哲学の強調でもなかった。（中略）保守主義の思想に対するボールドウィンの貢献は、抽象的な理論とか具体的な政策に関してというより、態度（attitudes）や反応（responses）に関するものであつた」^②。

確かにボールドウィン党首時代（一九二三～一九三七年）全体を俯瞰すれば、ほぼラムスデンの主張どおりで異論はない。しかしながら、イギリス憲政史上初の労働党政権・第一次マクドナルド（James Ramsay MacDonald）内閣〔一九二四年二月二二日～二月二三日〕期の野党党首時代に関しても、ラムスデンの主張はそのまま当てはまるのであろうか。

かような問題意識に基づき、本稿では最新の先行研究成果も踏まえたうえで、ボールドウィン保守主義に対するラムスデンの所論を再検討していく。そして、野党党首ボールドウィンが一九二四年に展開した「ニュー・コンサー

ヴァティズム」(New Conservatism)⁽³⁾と呼ばれる一連の政治的諸言説(但し今回は代表的な演説のみ)を分析し、その政治思想的側面に加え、ボールドウィンが戦間期初頭のイギリス保守主義思想にどのような点で貢献したのかについても説明することにした。

二・ジョン・ラムスデン「ボールドウィン保守主義」論再考

(一) ボールドウィン保守主義をめぐるラムスデンの所論について

上述したラムスデンは、ボールドウィン保守主義を分析する際のポイントになるとして、保守党政治家ボールドウィンに見られる「傾向」を以下のとおり五つ指摘している。⁽⁴⁾

- ① 「自ら意識して普通の人のように振舞うこと」(self-consciously ordinary)
- ② 「道徳的であること」(moral)
- ③ 「非挑発的であること」(unprovocative)
- ④ 「イングリンド的であること」(English)
- ⑤ 「専門的であること」(professional)

そこでこれら五つの傾向ないし特徴を手がかりに、ボールドウィン保守主義に関するラムスデンの見解を先ず整理

しておこう。

① 「自ら意識して普通の人のように振舞うこと」

ラムスデンによると、これは「リーダーであることを強調するのではなく、国民から尊敬されるよう努力する」態度のことである。ボールドウィンは、国民と一体化しようと努めてきたし、自分の権威の源を国民の支持に結びつけるタイプの政治家だった。加えてボールドウィンには、民主主義の育成も（一九二四年当時の）保守党にとって大きな意味をもつと考えていたふしがある。とはいえ、ボールドウィンが「平等」というイデオロギーに言及したことは一切なかったとされている。^⑤

② 「道徳的であること」

権利以上に義務を強く主張したボールドウィンにとって、道徳的側面はとりわけ重要な意味をもっている。ラムスデンも「人道的社会政策の必要性という点で、ボールドウィンが道徳的目標を示した」ことに注目している。本稿では、保守主義思想に対するボールドウィンの貢献は彼の示した道徳観にも関連づけられると考えるが、その詳細については次章で言及することにした^⑥。そして、この道徳性に基づいて生じる態度が、③の「非挑発的であること」になるとされる^⑥。

③ 「非挑発的であること」

ボールドウィンをチャーチル (Winston Churchill) など他の保守党指導者たちと区別するのが、非挑発性という傾向である。ボールドウィンは、全体的に調停 (conciliation) や宥和 (appeasement) の効果を信じていたので、必然的に対決 (confrontation) よりも妥協 (compromise) を志向する保守主義 (思想および戦略) となりやすい。

ラムスデンによれば、その具体例として以下の事実が指摘できるとされる。即ち、旧・自由党支持者や浮動票層にもアピールして保守党支持基盤を拡大しようと試みたこと。そのためにも、党内外から穏健かつ改革志向の党として認識される必要性を理解していたこと。世界恐慌以後の挙国内閣 (一種の大連立) にも適応できたこと。当時の対労働組合問題にもこの態度を適用した結果、逆に党内の反対派から 'semi-socialist' と呼ばれることもあったこと。そして、これまで保守党を分裂させてきた厄介な争点を回避することによって、総選挙 (一九二四年) にも勝利できたこと。^⑦

④ 「イングランド的であること」

これは、③の非挑発性に由来する特徴とされる。周知のようにボールドウィンは、保守党を「特定の有産階級」利益代表の党としてではなく、「国民」的利益を代表する党として描き出すことに成功した。ボールドウィンが保守党を「ナショナル」な党としてアピールした結果、逆に、政敵・労働党を「一部の狭い階級」利益に固執する「セクショナル」な党として攻撃する口実まで保守党側にもたらされたと言っても過言ではない。

この点についてラムスデンは、「イングランドの歴史は譲歩の原理を正当化するところに特徴があり、そうした国

民的特徴を共有するのが保守主義の特徴だと言っているかのようだ」と説明している。⁽⁸⁾ また、ボールドウィンが党首（首相）として行った演説などその政治的諸言説においても、この「イングラント（人）」志向は顕著と言えるが、その点については後ほど触れることにしよう。

⑤ 「専門的であること」

ボールドウィンのニュー・コンサーヴァティズムに潜む信条には、ジェントルマン的というよりはプレーヤー的な性質、換言すればプロフェッショナルな性質があるとラムスデンは指摘する。つまり、ボールドウィンが展開した一連のニュー・コンサーヴァティズムには、旧い考え方への拘りというよりもプラグマティックなリアリズムが備わっているという意味で、組織的かつビジネスライクな特徴もあるとされるのである。⁽⁹⁾

この傾向は、例えば社会主義の抬頭や労働党政権の誕生、そしてその国家（中央政府）介入政策を強く意識した彼の政治的諸言説から読み取ることができるかもしれない。

以上の各論的説明を行ったうえでラムスデンは、ボールドウィン保守主義や、その野党期（一九二四年）の具体的表れであるニュー・コンサーヴァティズムについて次のように総括する。

「ニュー・コンサーヴァティズムは、トーリーデモクラシー（Tory Democracy）⁽¹⁰⁾ や財産所有デモクラシー（the Property-owning Democracy）⁽¹¹⁾ 同様理論化できる要素は沢山あったけれども、元来理論的なものではなかったし、また

政策についても重大なインプリケーションを有してはいたが、そうしたインプリケーションを念頭に置いていたわけでもなかった。トリーデモクラシーや財産所有デモクラシーと同じくボールドウィンのニュー・コンサーヴァティズムは、そのクリエーターの本能に、即ちボールドウィンその人に負うものだったのである。⁽¹²⁾

(イギリス) 保守主義の基本的性格がまさにそうであるように、政治思想面とりわけ抽象的な理論面での脆弱性なし体系性の欠如という点では、確かにラムスデンの指摘どおりと言えるだろう。ボールドウィン自身、他の歴代保守党党首同様哲学者・思想家タイプの政治家ではなかったし、しかもそうした「知的側面」から敢えて距離を置くスタイルを好んだからである。

しかしながら、単純にそうした事実だけでボールドウィン保守主義を理解してもよいのだろうか。言い換えれば、局面ごとに変化するかもしれないボールドウィン保守主義を、イデオロギー性の希薄さ、哲学的理論的特徴(独自性)の弱さ、という一言で片づけてしまつて、果たして問題はないのだろうか。

そこで次節では、保守主義者ボールドウィンに関する最新の二つの先行研究に基づいて、ラムスデンの古典的所論を再検討しながら、上述した疑問点を解き明かしてみることになろう。

(二) ラムスデンの所論をめぐる再検討

ここで採り上げる二つの先行研究は、(A)イギリスの政治学者テイラー(Andrew Taylor)によつてなされた「ボールドウィン主要演説分析」(二〇一五年)と、(B)イギリスの政治文化を研究するサッカレー(David Thackeray)およびイギリス現代史研究者トイ(Richard Toye)を通じて行われた「ボールドウィン保守党主要綱領に関する研究」

（二〇二二年）である。いずれも比較的最近の研究であることから、従来とは異なる新しい知見が得られるものと思われる。これら二つの先行研究に基づく成果・視点を用いてラムスデンの所論（一九七八年）を再検討すると共に、ボールドウィン保守主義の新たな側面を浮かび上がらせることにしたい。

(A) 一九二〇年代の主要演説とボールドウィン

テイラーは、「現代保守党にとって決定的に重大な三年間」に行われ、しかも（大衆デモクラシーの定着、労働党の抬頭、労使対立の激化などをめぐる）ボールドウィンの思考や課題をカバーするとされる九つの主要演説を分析した¹³。かかる三年間とは一九二四年から一九二七年までの期間である。先述のようにイギリス憲政史上初の労働党政権と第二次ボールドウィン内閣（一九二四年一月四日～一九二九年六月四日）がこの時期に成立していることから、「保守党↓労働党↓保守党」という現代型政権交代の図式が初登場した時期でもある（もともとこの図式が完全に定着するのは、周知のように一九四五年の総選挙以降）。したがって一九二四年前後の数年は「現代イギリス政治を形成した決定的に重大な時期¹⁴」と見ることもできるのである。

そして分析の結果テイラーは、九つのボールドウィン演説でとりわけ使用度が高いキーワードやその政治思想の基本、党としての戦略を、以下のように指摘している。

- ・ボールドウィンが頻繁に使用していた典型的な言葉…イングラント (England)、労使間の安定 (Peace in Industry)
- ・ボールドウィンの思考の基準となる言葉…奉仕 (Service)、自由 (Freedom)

・ボールドウィン保守党の戦略となる言葉…政治教育 (Political Education)、『デモクラシーとその務め (Democracy and its Task)』⁽¹⁵⁾

以上の分析結果を踏まえたうえで、テイラーは次のように説明する。失業対策のために提案した保護関税導入政策（いわゆる関税改革、言い換えれば、従来の自由貿易政策を放棄する提案）が国民に拒絶されたことを意味する一九二三年総選挙敗北と、その後遺症（ハングパーラメントの出現、保守党の下野、自由党の再統一、労働党政権の誕生）を克服するためボールドウィン保守党は党の方針を再検討せざるを得なくなった。その結果、従来の関税改革に代わる新たな「レトリック」（とそれに基づく戦略）が中心的役割を果たすことになった。⁽¹⁷⁾したがって、ニュー・コンサーヴァティズムに象徴される「ボールドウィン保守主義の政治思想的側面および保守主義思想に対するボールドウィンの貢献」は、「保守」に関わる伝統的レトリックの活用に求められると考えられる。

テイラーによると、『課題』（世界大戦↓経済・社会・政体の破壊↓その産物としての大衆デモクラシーや労使対立、社会主義の抬頭↓イギリスの政治社会文化のさらなる衰退）と『解決』（パターナリズム、相互の敬愛、社会秩序の維持など）の二大要素から構成されるボールドウィン流レトリック戦略で決定的役割を果たすのが「日常的な決まり文句」(the commonplace)、即ち「トポイ」(topoi)であるとされる。その典型例としてテイラーは、「反対派との和解」「コモンゲランドの確認」「政治的極端派の排除」を挙げている。⁽¹⁸⁾ボールドウィンの政治的諸言説では、それらが「労使間の安定」や「インゲランド」、あるいは「奉仕」といった上記のキーワードで表現・アピールされたと考えてよい。こうしたトポイに基礎づけられたレトリック（戦略）とその自発的・意識的な発信ないしアピールこそ、いわゆる「ボ

ルドウィン保守主義¹⁹」とも言えるのである。

テイラーによる以上の研究成果を踏まえると、少なくとも一九二四年の野党期に保守党を率いることとなった（前首相）ボールドウィンは、元来イギリス保守主義に内在する政治哲学を、「イングリッシュ性」（Englishness）など単純で分かりやすい『レトリック』で新時代に相応しく再利用もしくは、理論づけ²⁰したと見ることができる。したがって、後述する「ボールドウィンのニュー・コンサーヴァティズム」もまた、テイラーの表現を借りれば「コアとなるテーマの設定次第でその出来具合が左右されるレトリック戦略を単純に言い表したもの²⁰」と理解することができよう。

そうだとすれば、保守主義思想に対するボールドウィンの貢献が政策でも哲学の強調でもなかったとするラムスデンの主張には、やや誇張があると言わざるを得ない。

（B）一九二〇年代の主要文書とボールドウィン

テイラーがボールドウィンの主要演説に注目したのに対し、サッカーとトイは、戦間期（一九二〇年代初頭）に保守党が公表した党綱領・政綱（programme）など文書に²¹関心を寄せている。それは別の言い方をすれば、選挙民に対する党または政府としての約束（promise）、即ち公約（pledge）が果たす役割と意義は無視できないということでもある。選挙公約、即ちマニフェスト（manifesto）を通じてのアピールが重要な意味をもつようになったこと——サッカーやトイによると、これがイギリス戦間期政治（interwar politics）の特徴の一つであった。マニフェストが一政権のマンデート（mandate）観の中心に位置づけられるようになったということは、換言すれば、議員候補者個人で行う

従来の選挙区民向け演説の位置づけが低下していくことを意味していた。戦間期におけるイギリス政治のこうした変化について、サッカレーらは次のように説明している。「各候補者の選挙演説は、一九一四年以前の段階ではその形式も中身も極めてバラバラだったのに、それ以降徐々にスタンダード化していくことになり、党中央が作成した資料や党マニフェストの文言に依拠するようになっていった」⁽²¹⁾。

そうだとすれば、第一次世界大戦後（戦間期）のイギリス政治では、各党マニフェストの基調を成す政治思想が、そしてとりわけ保守党ではその最終責任者である「党首」の政治哲学や理念などが、以前に比べはるかに重要性を帯びるようになったということになる。それゆえ、野党期の保守党党首ボールドウィンの政治思想的側面や、その保守主義思想に対する貢献もまた、こうした一連の党「文書」から見出すことができると言えよう。では、当時の保守党「党首」ボールドウィンの場合はどうだったのであろうか。

周知のように第一次世界大戦は、配給制度や徴兵制など国家（中央政府）による社会への介入・経済統制を劇的に拡大させた。そのため、第一次大戦直後のイギリス政治では、国債や膨張した財政をめぐる問題が大きな論争テーマとなっていた。この点について、どちらかというと保守党が戦前の状態への回帰を主張していたのに対し、労働党は国家による戦後社会再編を掲げながら、信頼に足る統治政党であることも、同時にアピールしようとしていたと考えてよい。その結果、労働党マニフェストの方が——その実現可能性はともかく——総じて詳細かつ充実した内容になっていた⁽²²⁾可能性が高い。

他方で、一九二〇年代を通じてこうした「プログラムを用いるスタイル」の政治が徐々に増加した結果、この流れとは逆に「アンチ・プロミス」(‘anti-promises’)の政治的アプローチ、つまり「これだけは確実に実行するという類の

約束はしない、あるいは詳細な公約に束縛されない」アプローチも増加するようになったと、サッカレーらは述べている。幅広い反・社会主義戦略の一環としてこの後者のアプローチを採用していたのが、第一次世界大戦終了直後の保守党であった。そして、とりわけボールドウィンに代表される一部の政治家は選挙公約のエスカレーションを批判したり、詳細な公約に対しては「自己の物質的豊かさに関心を抱き、感情に左右されやすい新しい有権者を誘惑する賄賂のようなもの」という懸念まで表明したりすることもあったと、サッカレーやトイは説明する⁽²³⁾。

ところが、党首ボールドウィンを含む保守党（保守主義者）全体が上記の「アンチ・プロミス」アプローチへの熱中を放棄したうえ、労働党や自由党と同じ「党の綱領に従った政治」（programmatic politics）に切り替わる「転機」が訪れた。即ち、政府労働党の社会改良プランに対抗し、また政権奪回を目指すボールドウィンが、野党党首の立場から様々な演説や政策文書刊行を通じてニュー・コンサーヴァティズムを発信した一九二四年がそれである。その意味でも、本稿で採り上げる一九二四年という年は、前述の programmatic politics に保守党が熱中し始めた画期的な年と言えるかもしれない。

ボールドウィン党首時代の保守党で、一九二四年頃こうした変化が生じた背景には、少数与党とはいえないギリス憲政史上初の労働党政権が誕生したこと、それに伴い、野党・保守党もその支持基盤を浮動票層や自由党支持者にまで拡大する必要性に迫られていた点などがある。その結果、先述した「党の綱領に従った政治」が保守党においても何らかの形で必要不可欠になったと考えられるのである。そして「党の綱領に従った政治」を実現し、ある程度——最低でも政権奪回を通じて——社会主義の浸透防止と国家構造の根本的転覆阻止を成功させるためには、保守党党首ボールドウィン自身、その保守主義の政治思想的側面をニュー・コンサーヴァティズムという形で新たに展開する必

要があつたと考えざるを得ない。

ボールドウィンは、その態度や反応が比較的分かりやすく、しかもそれらが重要な意味をもつ政治家だったのかも
しれない。しかしながら、初めて、労働党政権が誕生した時期に、初めて、野党・保守党を率いねばならない環境
だったため、ボールドウィンもまた、レトリックに基づいた哲学・理論のリニューアルや再強調（発信）という形で
保守主義思想の展開に貢献した（貢献せざるを得なかった）と見るのが妥当ではないかと思われるのである。

三・スタンリー・ボールドウィンのニュー・コンサーヴァティズム

では、あらためてニュー・コンサーヴァティズムとは何か。広義では、一九二四年の二月頃から夏頃に野党党首
ボールドウィンが行った演説を当時の新聞が紹介するため便宜上名づけた、¹¹ 呼称とされる。また、狭義においては、
かかる一連の政治的諸言説や党文書で表明された「保守党政策の刷新、党路線の再検討」に関する彼独自の立場や考
え方を指している。したがってボールドウィン保守主義の政治思想的側面はもちろん、保守主義思想に対する彼の貢
献について考察するうえでも重要な手がかりになると思われる。

なおニュー・コンサーヴァティズムの集大成は、保守党文書の監修担当者バハン（John Buchan）が執筆した原稿を
ボールドウィンの副官的存在ネヴィル・チェンバレン（Nevil Chamberlain）がまとめた結果、同年六月、*Looking*
Ahead: Unionist Principles and Aims という小冊子として刊行されたと見てよい。また、同年一〇月二九日に実施
された一九二四年総選挙「保守党マニフェスト」についても同様の位置づけが可能となる。

本稿は、紙幅の関係で、一九二四年上半期のボールドウィン主要演説を通じて表明された代表的な政治言説に限定し、彼のニュー・コンサーヴァティズムを分析していく。そのため、*Looking Ahead: Unionist Principles and Aims* の内容分析ならびに他党マニフェストとの比較も含めた『保守党マニフェスト』の内容分析は、やむを得ず次の機会に譲ることとしたい。

(一) その背景と意義

ニュー・コンサーヴァティズムと総称される一連の演説が戦間期初頭(主として一九二四年上半期)に展開された背景として、前述した一九二三年総選挙敗北後の党内「ガス抜き」(造反・分裂防止)、あるいは総選挙敗北の結果一九二四年一月に誕生した労働党政権への危機感ないし対応という「近因」が挙げられる。したがって、「態度」や「反応」そしてボールドウィン自身の「本能」の結果という意味では、上述したラムスデンの指摘どおりでもある。しかしそれに加え、以下の点(変化)も「遠因」として指摘することができよう。

・米独の抬頭と第一次世界大戦勃発、そして国内の労使紛争(階級闘争)の増加に伴い、一九世紀以来の伝統である「イギリス型自由主義的政治経済システム」(自由貿易体制、小さな政府など)が衰退・弱体化したこと。それに合わせて「拡張国家」(the extended state)が新たに登場したこと。

・第一次世界大戦終了後一九二二年まで保守党との連立を維持してきた自由党ロイドジョージ(David Lloyd George)首相を中心に、ネオ・コーポラティズムもしくはステイト・コーポラティズム的手法(「政府・財界幹部

「労組代表」三者から成る新たな協議システムを通じての意思決定や政策遂行」が設計されつつあったこと。⁽²⁴⁾

こうした状況、とりわけ一九二二年まで続いたロイド・ジョージ連立内閣とその戦後構想に対する保守党内（ボールドウィンなど多数派）の不信や不満は、一九二二年政変をもたらした。この政変は、連立シニア・パートナー保守党の議員総会投票の結果、自由党ロイド・ジョージ派との連立解消を決定してロイド・ジョージ連立政権が崩壊した後、一九二二年総選挙で与党・保守党が単独勝利を収めた出来事である。そしてそれに基づき「連立維持派」オースティン・チェンバレン（Austen Chamberlain）から「連立解消派」ボナロー（Andrew Bonar Law）にリーダーが交代し、ボナロー保守党単独政権の誕生に伴い、それまで無名の政治家に過ぎなかったボールドウィンが蔵相に抜擢された（次期党首候補の一人に昇格した）ことも、同政変の意義として無視することはできない。⁽²⁵⁾

そのため、上述した「中道的な」ロイド・ジョージ流解決策ないしロイド・ジョージ型システムに対するアンチテーゼであり、同時に保守党独自のオルターナティブとなったのが「ボールドウィン保守主義」ではなかったかと考えられる。因みに、戦間期イギリス政治研究の第一人者ミドルマス（Keith Middlemas）は、ボールドウィン自身が唱えた一つのヴィジョンについて、これを「パターンリスティックな労使間調和」策と見ている。また、ミドルマスは、ボナローの後継党首ボールドウィンが一九二二年から一九二六年にかけて考案し実現させた戦略として、以下の二つを指摘している。

① 先ず、当初敵対していたA・チェンバレンやチャーチルなど「旧・連立維持派」の保守党幹部議員たちを現執行

部に復帰させること。

②次に、ボナパローとは異なる独自の労使政策アプローチを急増し、それを自発的に再編するため、一九世紀の保守党政治家ディズレーリ（Benjamin Disraeli）の遺産や神話を利用すること。⁽²⁶⁾

これに加え、一九二〇年代以降ボールドウィンをはじめ多くの保守主義者が「反・ロイドジョージ」化した背景に、いわゆる「人民予算」(案) (People's Budget)⁽²⁷⁾ に象徴される一連の政府主導型「富の再配分」や、第一次世界大戦勃発以前の自由党政権下で実施された、失業保険制度など一群の集産主義的社会立法（社会改良）の制度化、こうした諸政策の実現があったことも忘れてはならない。言い換えれば、従来の古典的で消極的な自由主義とは異なり、積極的 という意味で 新しい 自由主義、いわゆる「ニュー・リベラリズム」(New Liberalism) 路線の採用・拡大とそれに対する危機感が、当然保守党側には存在したと思われる。国家（中央政府）主導によるこうした一連の政策は、普通の保守主義者からすれば「社会主義」的に見えたのであろう。

さらに、イギリス保守主義のイデオロギー的特質や政治思想を研究しているグリーン（E. H. H. Green）は、第一次世界大戦終了後も四年続いたロイドジョージ連立政権について、「非・社会主義勢力」と「反・社会主義勢力」の二大勢力を一つの貫性あるブロック（選挙連合）にまとめる方策と位置づけた。にもかかわらず、反・社会主義勢力であるはずのボールドウィンと保守主義者が「反・ロイドジョージ連立」路線に踏み切った要因については、自由党との連立を通じてではなく、保守党そのものを反・社会主義の大きな防波堤として確立する意思があったからだとしている。

グリーンの研究によると、当時経済面で相対的に苦しい状況にあった中産階級は、保守党が掲げる「反・ロイド・ジョージ連立」を支持しやすくなったという。一九一四年の世界大戦勃発以来インフレが深刻化していたので、戦争に投資しながら貯蓄にも精励していた人びとには不満が溜りやすい。そのうえ、納税してもそれが低所得者向け福祉財源となつて消えていく現状は「ハイリスク・ノーリターン」と言えたからである。こうした層がボールドウィンの「新しい」保守主義路線（反・ロイド・ジョージ連立、反・社会主義）支持を表明するのは、ある意味当然かもしれない。それゆえ一九二三年以降ボールドウィン「新」党首率いる「新」保守党は、「新興勢力」労働党に対抗して「反・社会主義」を標榜すると同時に、「（自由党に代わつて）新たに」中産階級の利益も護る党でなければならなかった。⁽²⁸⁾

したがって、そうした変化や危機を乗り越えるため、従来の保守主義思想に「リニューアル」という形で貢献したのが党首ボールドウィンとその保守主義、そしてニュー・コンサーヴァティズムと考えられ、その部分に意義を見出すことができるのである。

(二) その概要と政治思想的特質

さて、そうした背景を通じて生成したボールドウィンのニュー・コンサーヴァティズムは、以下の演説内容などから見出せるのではないかと思われる。ここでは、先ずそれらの概要（演説内容の重要部分や新聞報道記事の抜粋、あるいはそれらの要旨など）を検討した後、その底流に潜む政治思想的特質について——先行研究成果も踏まえて——考察する。

① 「ホテル・セシルでのボールドウィン演説」（一九二四年二月二一日）

「今後、我々にとって大きな敵となっていくのは、今や死にかけの自由党ではない。目下大いに勢いづいた労働党だと思われる。諸君は、平静を装ったり拒絶したり、あるいは坐したままのやり方で労働党が倒せるとは思うまい。今この国の労働党にはバイタリティがあるからだ。だから我々もこれと似たバイタリティを共有できない限り、勝利を収めることは叶わないであろう。（以下略）⁽²⁹⁾」

ラムスデンによれば、保守党の真の敵が自由党から労働党に移ったことを理解してもらおうと同時に、新しいスタイルの保守主義を呼びかける主旨の演説である。それゆえこの演説は、「ニュー・コンサーヴァティズム」と称された一連の演説の中でもキーノートの位置づけがなされている。さらに、前年末に実施された一九二三年総選挙——その結果については註(16)を参照——敗北後下野したボールドウィン党首の党内権威まで復活した印象を与える内容でもあった。⁽³⁰⁾

また、この演説が行われた会合の様子を報じたタイムズ紙（The Times）の記事によると、同演説のポイントとして以下の点が指摘されている。

- ・ この演説を通じて、（敗戦）党首ボールドウィンに再び党内信任状が与えられたこと
- ・ 党首としてのボールドウィンの立場が再確認されたので、党内分裂の印象を回避することに成功したこと
- ・ したがって、今後の（責任野党）保守党としては、建設的で練りに練った、救済措置としての代替案を展開していく必要があること
- ・ そしてそのためにもボールドウィンは、自分自身の党のために自分自身の理想（ideals）を党に深く刻み込むべ

きであること。またそうすることが国のためにもなるのだから、そのようにしたと全国民に向けてきちんと証明すべきであり、またそうすることがリーダーの務めでもあること⁽³¹⁾（傍線引用者）

⑥ 「ホテル・ヴィクトリアでのボールドウィン演説」（一九二四年四月八日）

「自由党の運命／非国教徒と保守主義／ボールドウィン氏の忠告」と題した一九二四年四月九日のタイムズ紙記事によると、四月八日に上記ホテルで行われた非国教徒統一党連盟（the Non-conformist Unionist League）昼食会でのボールドウィン演説である。

二月のホテル・セシル演説でも触れた「自由党時代の終焉宣言と社会主義の打倒」という共通目標を達成する手段として、「時代遅れのリベラリズムに固執してはならないこと、元来自由党支持者の多い非国教徒を保守党支持者として包摂する必要性」などを訴えた内容となっている⁽³²⁾。そしてこれら二つの訴えから読み取れるボールドウィン保守主義の二大エッセンスとして、①非国教徒たちに保守党支持を訴えることで「分断」よりも「協同」や「団結」を強調していること、②労働党の一部極端派が主張する社会主義に——非国教徒たちと一緒に——断固異議申し立てを行うことで労働党の勢いを阻止しようとしていること、これら二点を指摘することができよう。さらにボールドウィンは同演説において、団結や包摂という手段の根底にある理念ないし哲学を次のように披露したと考えられる。「ここに居られる全ての人が喜んで奉仕できる、そんな基準に立脚した会合という形で、こうした昼食会が発展していくことを望んでいる。……兄弟愛、友情、そして保守党でしか見ることのできない忠勤、かような精神がその基準に含まれるよう望むものである⁽³³⁾」。

③ 「ロイヤル・アルバートホールでのボールドウィン演説」（一九二四年五月二日）

「統一党の方針／民主主義と帝国／ボールドウィン氏が発表したプリンシプル」と題した一九二四年五月三日のタイムズ紙記事によると、五月二日にロイヤル・アルバートホールで行われたボールドウィン演説である。ここでは「保守党新政策の表明」が行われており、その骨子を要約して列挙すると以下のとおりとなる。

- ・ 一九二三年総選挙結果を尊重し、今後保守党は一般関税導入について一切言及しない
- ・ 自由貿易を維持していくと同時に、一般関税と異なる産業保護政策については今後とも検討していく
- ・ 効果的な国内産業保護を実現するためには、わが国民精神の団結が不可欠である³⁴

④ 「ジュニア・インペリアル・リーグでのボールドウィン演説」（一九二四年五月三日）

「統一党の方針／帝国と社会福祉という青年の理想に対するボールドウィン氏の訴え」と題した一九二四年五月五日のタイムズ紙記事によると、五月二日にジュニア・インペリアル・リーグ (the Junior Imperial League) の年次夕食会で行われたボールドウィン演説である。ここでは、保守党党首に再任されたことへの感謝が述べられ、また「保守党新政策についての再表明」もなされている。その意味で同演説は③の後篇として位置づけることもできよう。その骨子を要約して列挙すると次のようになる。

- ・ 与党労働党がその政策を実行に移さなかったとしても、そこはやはり社会主義政党なので、今までとは異なり、保守党もそのプロパガンダと戦わなくてはならない
- ・ 保守党としては以下の実現を望んでいる。即ち、

労使関係安定化を促進する手段と方法を新たに勧告すること

柔軟性に乏しい社会ではなく、一人ひとりが徐々に所有者 (an owner) と成れるような社会づくり⁽³⁵⁾

⑤ 「クイーンズホールでのボールドウィン演説」(一九二四年五月九日)

「統一党のプログラム／食料品価格について／政権復帰後に調査検討」と題された一九二四年五月一〇日のタイムズ紙記事によると、五月九日の統一党婦人部会 (the Women's Unionist Organization) 代表者集会でなされたボールドウィン演説である。前述した「党の綱領に従った政治」の受け入れ表明とも言える内容であると同時に、社会改良や国家の役割に関するボールドウィンの見解を示した内容として評価することもできる。その骨子を要約して整理すると、次のようになる。

- ・個人と同じで、国家であつても際限なく金銭的な援助が行えるわけではないということを、我々は肝に銘じておかねばならない
- ・わが党は社会改良にも全面的な関心を寄せているが、私としては皆さんに押さえておいて欲しいことがある。それは社会改良以外にも、誠に素晴らしい何かがあるということだ
- ・社会主義との戦いになったら綱領 (プログラム) 同士の戦いになるということを、我々も想定しておく必要がある

- ・社会主義は、あらゆる進歩と良き統治 (good government) を大抵破滅に導く存在である
- ・破壊をもたらすドクトリンの拡大に目下抵抗している偉大な一つの砦がある。その砦こそ保守および統一党であ

り、しかもそれは、鮮明でしつかりとした政策を国民に提示できる党でもある（傍線引用者）³⁶

最後に、以上の政治的諸言説（演説）から見た、ニュー・コンサーヴァティズムの政治思想的特質について考察してみることしよう。

上記の各演説から明確に読み取れることは、旧来型の「静観的で、対・自由党的な」イギリス保守主義とは異なる「新たな側面」をボールドウィンが強調した点である。それを簡単に要約すれば、今後自由党ではなく労働党や社会主義に対抗していくためにも、保守党および保守主義には従来以上に「積極的かつ建設的な役割」が欠かせなくなるという考え方と言えるであろう。それに関する主な言及としては、^a建設的で練りに練った、救済措置としての代替案の展開、^b元来自由党支持者の多い非国教徒を保守党支持者として包摂する必要性、^c自由貿易という現状を維持したうえで新たな産業保護政策の検討、^d労使関係安定化を促進するための財産所有デモクラシー（註（11）を参照）の模索、そして^e社会主義的で大規模な国家介入ではなく控え目な社会改良への関心、また政府主導による社会改良以外の『誠に素晴らしい何か』についての認識とその活用、などを指摘することができる。

加えて、そうしたボールドウィン保守主義の新しい政治思想的側面（ニュー・コンサーヴァティズム）を、大衆デモクラシーの時代に合わせて分かりやすく置き換えたものが、テイラーも指摘したように、「イングラランド」や「労使間の安定」「奉仕」といった言葉に象徴されるトポイ、即ち『レトリック』だったと考えられる。前者二つは、分断や格差、階級対立を超越した「国民的統一と団結」「労使協同」を意味している。しかしそれらは、保守主義者ボールドウィンに言わせると、かつての自由党や現在（一九二四年）の労働党による「国家（中央政府）主導型」では

なく、それとは異なり保守主義的で、しかも『誠に素晴らしい何か』を通じて達成され実現するものでなければならぬ。

では、これらのレトリックに共通する、換言すればボールドウィン保守主義（既述の主要演説内容から見たニュー・コンサーヴァティズム）の政治思想的側面全体を貫くキーワードとなる『誠に素晴らしい何か』とは、果たして何を意味するのであろうか。

それは、ボールドウィンが前述の「奉仕」という観念で表現した道徳観ないし公共哲学ではなかったかと考える。因みに、既述のとおりテイラーもまた、「自由」の観念以外ではこの「奉仕」をボールドウィンの思考の基準と位置づけている。この点については、一九二四年に行った二つの演説の中で、ボールドウィンが「奉仕」の道徳観とその重要性を次のように評価したことからも明らかと言えよう。そこで少々長くなるが、以下のとおり引用することにした。

・「偉大なフレンドリー・ソサイエティ (Friendly Society) 運動の立場を努めて理解しようなどと野暮なことは言うまい。他にも沢山ある素晴らしいものと同じように、それは純イングラッド産であり、かつその起源は、最高に素晴らしいものを数多く生み出してきた普通のイングラッド人に求められる。いわばそれは、イングラッドという土壌に根差したものであり、また激しく移ろいやすい今の世の中においては、仕事の違いを乗り越え人生の指針となるプリンシプルの最も偉大な一部をわが国民に教えたり、誰も教えてくれない数多くの課題を学んだりするための、大いなる手段であり続けた。(中略) フレンドリー・ソサイエティの大勢のメンバーが積み立ててく

れた貯金額のおかげで、わが国の公共サービスと社会活動がいかに実り多い形で利用されてきたか私もよく理解している。この運動の全体的精神とは他者への奉仕（service for others）であり、イングランドはもとより世界中で今必要とされる精神なのだが、（中略）フレンドリー・ソサイエティが吹き込んでくれた奉仕の精神をわが国民に教えることによって、わが国のデモクラシーをより適切で高貴なものに変えていくという、我々にしかできない役割が果たせるであろうし、またそうすることで我々自身だけでなく世界全体も支援していくことになるのだ。」（一九二四年二月一八日、ストーポート演説³⁷）（傍線引用者）

・「デモクラシーを試す時が来た。……今日の我々は、わが国に奉仕するという意味で、おそらく如何なる党も経験したことのない素晴らしい機会に直面しているのではないだろうか。……この偉大なデモクラシーを教育していくことが諸君の義務であり、諸君が率先して取り組むべき義務なのである。（中略）私が見てみたいと思っているもの。それは統一党の人びと全員が生来もち合わせている、国民全体に対する奉仕の精神（the spirit of service to the whole nation）なのである——因みに、ここで言う統一党とは、二世代前にデイズレーリ（Benjamin Disraeli）が語った二つの国民の統一という意味での統一党である。」（一九二四年二月四日、アルバートホール演説³⁸）（傍線引用者）

かかるポールドウィン演説から、社会改良の実施や弱者救済あるいは国民の統一といった課題を解決する一手段として、フレンドリー・ソサイエティに代表される「自由」かつ自発的な結社（つまり国家や政府よりも社会や個人）とそ

の役割に期待を寄せていたことが読み取れる。同時に、テイラーの分析結果にも見られたように、上記の演説から、ブレンドリー・ソサイエティ³⁸を軸として、「奉仕——イングランド——教育——デモクラシー——ディズレーリの遺産」というボールドウィンの政治思想ないし公共哲学の関連図式まで導き出せるのである。したがってこれら二つの演説も、ボールドウィン保守主義の政治思想的側面、加えて保守主義思想に対するボールドウィンの貢献を理解するための鍵として重視しなければならない。

四・結 語

本稿は、論題についての「中間報告」的位置づけとなる。

ニュー・コンサーヴァティズムと称される一連のボールドウィン演説（政治的諸言説）から見たボールドウィン保守主義の政治思想的側面は、とりわけその中核を成す（公共）「奉仕」の理念と関係の深い道徳観・哲学をレトリックで表明した部分に求めることができる。

ボールドウィン研究の第一人者ウィリアムソン（Phillip Williamson）は、「コンサーヴァティブ・アイデアリズム」（Conservative Idealism）という表現を用いてこれを説明した。ウィリアムソンによれば、ボールドウィンによつてなされた社会改良についての言及なども、統一党アイデアリズムの中軸になるとされる。³⁹ それに加え、この「奉仕」に関するレトリックは、階級闘争や左右の極端主義を排して、党派を超越した「国民」的統一や団結を促すと同時に、保守党支持基盤拡大の役割も担うことになった。⁴⁰ その意味では、一〇〇年経った現在においても、社会的分断克服のヒ

ントとなり得るかもしれない。

以上の考察から、一年にも満たない野党党首時代（一九二四年）だったにもかかわらず、ボールドウィンは上述のレトリック（戦略）を通じて戦間期初頭のイギリス保守主義思想「リニューアル」に貢献したと考えてよい。それゆえボールドウィンのニュー・コンサーヴァティズムもまた、文字どおり「新し」く、そして道徳的でやや建設的な（ウィリアムソンの表現を借りれば理想主義的な）性質を備えた保守主義と言うことができるのである。

本論でも述べたように本稿では、ニュー・コンサーヴァティズムを「文書」化した成果物（*Looking Ahead* や党マニフェスト）の内容面について、紙幅の都合上分析・検討することができなかった。それに加え、一九二四年前後に行われた各総選挙マニフェストの三党比較分析の必要性も残されており、ボールドウィン保守主義に関する今後の研究課題としたい。

（１）周知のように「保守主義」には、人間のもつ心理的傾向としての保守主義（自然的保守主義）と、保守党という政党の教義ないし信条を表す保守主義（政治的・近代的保守主義）という二つの側面がある。

Cf. Hugh Cecil, *Conservatism* (London: William and Norgate) 1921. (栄田卓弘訳『保守主義とは何か』早稲田大学出版部、一九七九年を参照)。

本稿は、保守主義を後者の意味で用いている。したがって「ボールドウィン保守主義」(Baldwin's Conservatism)とは、イギリス保守党党首ボールドウィンによる一連の（レトリックも含めた）政治的言説と行為、そこから派生した具体的な戦略的アプローチや政策、さらにはそれら全ての根底を成している、保守党政治家ボールドウィン個人の政治信条・価値観・思想などを指す。

- (2) John Ramsden, *The Age of Balfour and Baldwin 1902-1940* (London: Longman) 1978, p. 207.
- (3) ニュー・コンサーヴァティズム」(New Conservatism 即ち、新しい保守主義) という用語・表現について付言しておきたい。

イギリス保守党史・保守主義史では、第二次世界大戦後、サッチャリズム (Thatcherism) 的な「新保守主義」(Neo Conservatism) が本格的に登場する一九七五年頃までの保守主義についても、しばしば「新しい保守主義」(New Conservatism) と呼ぶことがある。これは具体的には、戦後労働党との「合意の政治」に基づき、国家の介入や混合経済を容認する保守主義である。Cf. Frank O'Gorman, *British Conservatism Conservative Thought from Burke to Thatcher* (London: Longman) 1986, pp. 47-52, pp. 194-210.

それゆえ、本稿では特別な断りがない限り、ニュー・コンサーヴァティズムに関しては、ボールドウィンの政治的諸言説などを軸とする一九二四年当時の「新しい」保守主義という意味で用いることにする。

- (4) *Ibid.*, p.208.
- (5) *Ibid.*, pp. 208-213.
- (6) *Ibid.*, pp. 208-211.
- (7) *Ibid.*, p. 211.
- (8) *Ibid.*, p. 212.
- (9) *Ibid.*, p. 213.
- (10) トーリーデモクラシーについて、イギリス保守党史家ブレイク (Robert Blake) は、以下のとおり二つの意味があるとしている。即ち、労働者階級にアピールするため構想された——例えば下層階級向け健康保険制度創設などの——政策的側面、そして都市部の中産階級党員向け党内発言の場である党全国連合 (National Union) の民主化という党組織上の問題がそれである。Robert Blake, *The Conservative Party from Peel to Thatcher* (London: Fontana Press) 1985, pp. 147-148. (早川崇訳『英国保守党史』労働法令協会、一九七九年、一七八頁)。

いずれにしてもトーリーデモクラシーには——選挙対策上の必要性も当然伴うとはいえ——保守党側から民衆に配慮したり、民衆を保護したりすべきという道徳的・政策的立場や政治的信条ないし価値観が含まれていると言えよう。

- (11) 財産所有デモクラシーとは「男女普通選挙の時代においては、可能な限り大勢の給与所得者が何らかのプロパティやステイタスを持つことによって、程度の差こそあれ財産所有者が主体となるため、結果として民主政治も安定する」という保守党側の考え方である。この考えを一九二〇年代初頭に示した保守党政治家スケルトン (Archibald Noel Skelton) によると、それによって資本家と労働者との経済的溝が埋まるので国家もデモクラシーも安定し、私有財産に関する人生観を示すことも可能になるとされる。

また、スケルトンによれば、財産所有デモクラシーは社会主義下では達成されず、そのため給与所得者が財産所有者になろうとする努力は保守主義にのみ関連づけられるとされる。Noel Skelton with an Introduction by the Right Hon. Sir Robert Horne G. B. E., K. C., M. P., *Constructive Conservatism* (Edinburgh and London: William Blackwood and Sons) 1924, pp. 16-17, pp. 19-20, pp. 23-24.

- (12) J. Ramsden, *op. cit.*, p. 207.

- (13) Andrew Taylor, “The oratory of Stanley Baldwin”, in Richard Hayton and Andrew S. Crines (eds.), *Conservative orators from Baldwin to Cameron* (Manchester: Manchester University Press) 2015, p. 16.

テイラーが分析対象とした九つのボールドウィン演説は以下のとおり。

- ・ 一九二四年五月六日 セント・ジョージ王立協会演説
- ・ 一九二五年三月六日 庶民院演説
- ・ 一九二五年三月一三日 リーズ午餐会クラブ演説
- ・ 一九二五年一月六日 エジンバラ大学演説
- ・ 一九二六年六月一二日 チップナム集会演説
- ・ 一九二六年六月一六日 ジュニア・インペリアル・リーグ演説

- ・ 一九二六年九月二七日 フィリップ・スコット・カレッジ演説
- ・ 一九二七年三月四日 ケンブリッジ大学保守党協会演説
- ・ 一九二七年八月三日 オタワ市カナダ人クラブ演説

Ibid., p.16の表一に基づき筆者作成。

一九二四年五月六日の「セント・ジョージ王立協会演説」のみ野党党首時代に行われている。

- (14) *Ibid.*, p. 14.

一九二四年の意義については Martin Pugh, *The Making of Modern British Politics 1867-1939*, second edition (Oxford: Blackwell Publishers) 1993 も参照のこと。

- (15) *Ibid.*, pp. 16-17.

- (16) 主要三党の一九二三年総選挙結果は以下のとおり。() 内の数字は得票率 定数六一五議席 投票率七〇・八%
保守党 二五八議席 (三八・一%) 労働党 一九一議席 (三〇・五%) 自由党 一五九議席 (二九・六%)

Cf. Roger Mortimore and Andrew Blick (eds.), *Butler's British Political Facts* (London: Palgrave Macmillan) 2018, p. 377.

- (17) A. Taylor, *op. cit.*, p.15.

- (18) *Ibid.*, p. 23, p. 25, p. 28.

- (19) *Ibid.*, p. 29.

- (20) *Ibid.*, p. 17.

また、これに加えてテイラーは、ニュー・コンサーヴァティズムの中核を成す政治的文化的観念としても、「イングリッシュネス」や「イングランドのイメージ」を指摘している。

- (21) David Thackeray and Richard Toye, *Age of Promises Electoral Pledges in Twentieth-Century Britain* (Oxford: Oxford University Press) 2021, pp. 55-56.

- (22) *Ibid.*, p. 55.

- (23) *Ibid.*, p. 59, pp. 55-56.
- (24) Bill Schwarz, “Conservatives and Corporatism”, *New Left Review*, 166, 1987, p. 113. Keith Middlemas, *Politics in Industrial Society, The Experience of the British System since 1911* (London: André Deutsch) 1979, pp. 20-21, p. 169.
- (25) 一九二二年政変に関する分析については、拙稿「イギリス保守主義から見た一九二二年政変の再検討——スタンリー・ボールドウィンの保守主義思想を中心として——」(『政経研究』第五六巻第二号、日本大学法学会、二〇一九年)を参照されたい。
- (26) K. Middlemas, *op. cit.*, pp. 172-173.
- (27) 周知のように、当時の蔵相ロイド・ジョージが提出した「人民予算」(案)は、社会福祉を実現しその財源を確保するため、社会的弱者や相対的貧困層の税負担を軽減する代わりに、土地所有者など富裕層を増税の対象とした極めて急進的な予算(案)である。
- (28) E. H. H. Green, *Ideologies of Conservatism Conservative Political Ideas in the Twentieth Century* (Oxford: Oxford University Press) 2002, p. 130, pp. 132-134.
- (29) Gleanings and Memoranda, Mar. 1924, in J. Ramsden, *op. cit.*, p. 190.
- (30) J. Ramsden, *op. cit.*, p. 190.
- (31) *The Times*, 12 February 1924.
当時のタイムズ紙は、ほとんど保守党の御用新聞的役割を担っていたせいもあり、ボールドウィンに極めて寛容的・同情的な報道と感じざるを得ない。
- (32) *The Times*, 9 April 1924.
この時期のイギリス保守党は、アイルランドの分離・独立に反対し、連合王国の統一を維持する立場から、「統一党」(Unionists)という名称も併用していた。本稿では原則として「保守党」という名称を用いるが、新聞記事その他を直接引用する場合は原文どおり「統一党」という名称もそのまま使用している。

(33) 同上。

この昼食会に同席していたN・チェンバレンも「最早無理だと分かっているが今後も一つの党として活動し続けるのか否か、今後数年という限られた時間の中で、自由党関係者の諸君は選択を迫られると確信する。(中略) したがって自由党員の諸君としては、自分との共感や類似点をより多く見出せるのが保守党か労働党か選択することになるであろう」と発言して、ボールドウィンの保守主義を具体的に補完している。

(34) *The Times*, 3 May 1924.

(35) *The Times*, 5 May 1924.

(36) *The Times*, 10 May 1924.

(37) Stanley Baldwin, *On England And other Addresses* (London: Philip Allan) 1926, pp. 263-264.

フレンドリー・ソサイエティ(共済組合、友愛協会)は、産業革命とほぼ同時進行で登場してきたとされ、基本的には「相互扶助活動を中心とし、宴会を開いたり、会を誇示する行事を催したりする自発的結社」である。その機能面においては「基金積立協会」と「収益分配協会」に大別される(篠塚信義)。

フレンドリー・ソサイエティの詳細については、篠塚信義「産業革命と民衆の結社 友愛協会」(川北稔編・綾部恒雄監修『結社のイギリス史 クラブから帝国まで』山川出版社、二〇〇五年所収)一一八―一二三頁を参照。

(38) S. Baldwin, *op. cit.*, p. 70, p. 73.

(39) Philip Williamson and Edward Baldwin (eds.), *Baldwin Papers A Conservative Statesman 1908-1947* (Cambridge: Cambridge University Press) 2004, p. 145.

(40) P. Williamson, *Stanley Baldwin Conservative leadership and national values* (Cambridge: Cambridge University Press) 1999, p. 217, p. 341.

ウィリアムソンは、ボールドウィンが公に発した言葉の中で最も重要なものが「奉仕」であり、この言葉からボールドウィンが保守主義をどのように理解していたか分かると述べている。ウィリアムソンによれば、ボールドウィンにとって「奉仕」と

は、個人とコミュニティを非・社会主義的な方法で調和させるものであり、また不平等という保守的な考えと、自由という民主的な概念を、両立可能に見せることも可能な存在とされる。

Ibid., p.212, p. 218.